

国籍ってなんだろう？

著者	陳 天璽
ページ	20-21
発行年	2011-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10502/4805

国籍って なんだろう？

陳天璽



一家が無国籍となった翌年、1973年頃撮影された陳さん家族の写真。中央で母親に抱かれている子どもが陳天璽さん本人。帰化して日本国籍を取得するか、中華人民共和国の国籍に変更するか、無国籍の道を選ぶか…過酷な選択を迫られた結果だった。



ちん・てんじ Lara, CHEN Tien-shi

1971年、横浜中華街生まれ。2000年、筑波大学大学院国際政治経済学研究科修了。1994年より約1年間、香港中文大学に留学。1997～2000年、ハーバード大学フェアバンクスセンター・東アジア研究所客員研究員。日本学術振興会特別研究員(東京大学総合文化研究科)などを経て、2010年現在、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授。華僑・華人の問題をはじめ、移民やマイノリティの問題、国境・国籍・無国籍者に関する研究に従事。著書に、『華人ディアスポラ・華商のネットワークとアイデンティティ』(明石書店)、『無国籍』(新潮社)などがある。

「あなたの国籍はどこですか？ なぜその国籍なのですか？」と尋ねられたら、みなさんはなんと答えるでしょう。

「生まれたのがこの国だから」「お父さん（お母さん）が、この国の人だから」……。

じつは国籍の決まり方は、国によってさまざまです。そして、それぞれの国と国の制度がぶつかりあって、無国籍になることもあります。

私は1971年に日本で生まれましたが、華僑として横浜の中華街で暮らしていた両親は当時「中華民国」（台湾）の国民でした。1972年に日本が中華人民共和国と国交を樹立した段階で、中華民国とは国交が断絶されてしまったため、家族は無国籍となり、私も生後まもなく無国籍者として三十数年過ごすこととなりました。

私は現在、無国籍の人びとの研究をしています。

無国籍の人たちは、まさにマイノリティ（少数派）の中のマイノリティ。存在がやっとならぬようになり、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）においても実態調査や支援が行われるようになってきました（2009年の時点では、日本に約1400人、世界には1200万人いると推計されています）。

無国籍の状態が発生する原因は、それぞれの国家のあり方と人びととの関係や、制度の変化、法の抵触、行政処理の不備など、いろいろな事情が複雑に絡み合っています。問題の解決には、国際的な連携も必要です。

わかりにくい問題なので、人に伝えるのも難しい。当事者は周りの人にわかってもらえないだろうと伝えること自体を諦めてしまったり、無国籍であることをコンプレックスに感じ人に隠したままにいることも少なくありません。

私も研究の道を志し、物事を客観的に見るトレーニングを受けるまで、自分が無国籍であるということをも人に明かさない（明かせない）でいました。しかし、フィールドワークを続けていく中で、調査対象である当事者と信頼関係を築き、インタビューで本当の気持ちを話してもらうために、私がまず自分が何者であるかを伝え、自分をさらけ出さなくてはならないことを学びました。

無国籍の人は、日々多くの精神的ストレスを抱えて生きています。

「教育を受けられないのではないか」「仕事を探すときに差別されないか」「結婚できないのではないか」……。移動の制限をかけられたり出入国の手続きにうんざりするほど手間がかかる……。

本来は人が快適に暮らしていくための制度や法律なのに、心や生き方まで支配されふりまわされてしまうのです。

制度に屈してしまいそうになりながらも、公に交渉していかなければならないこともしばしばで、当事者は生き抜くためにエネルギーがたくさん必要です。

しかし、そのことで「国」というものの限界や法の矛盾など、見えてくるものもあるのです。

私は現在、日本国籍を取得していますが、それも一つの選択、人生の中での過程だと思っています。

国籍や民族、出自などで色分けせず、「個」を見てほしいです。



「無国籍」
陳天瑩 著
新潮社